

[489] “革命，革命，革过一革的”——革命（六）『阿Q正伝』を読む（12）

(45) “吴妈长久不见了”

秀才の女房の寧波式の寝台と錢家だか趙家だかのテーブルと椅子を小Dに土地廟まで運ばせて……、阿Qの妄想は続く。

“赵司晨的妹子真丑。皱七嫂的女儿过几年再说。假洋鬼子的老婆会和没有辫子的男人睡觉，吓，不是好东西！秀才的老婆是眼胞上有疤的。……吴妈长久不见了，不知道在那里，——可惜脚太大。”（趙司晨の妹はブスだ。鄒七嫂の娘はまだ2、3年早い。ニセ毛唐の女房は辮髪のない男と寝やがって、ペツ、ろくな奴じゃない。秀才の女房はまぶたにできものの痕がある。……吳媽は長いこと見ないが、どこにいるのやら、——惜しいことに足がデカすぎる。）

吳媽の足が大きすぎると言っているのは、彼女が労働者で纏足をしていないからである。

(46) “有意无意的走到静修庵”

考えが十分にまとまらないうちに、阿Qはもういびきをかいていた。ろうそくはまだ半分も減って
いず、赤い炎がぼかんとあいた口を照らしていた。

「ホォーッ！」と阿Qは突然大声をあげ、あわててあたりを見回したが、ろうそくが目につくと、またそのまま寝入ってしまった。

明るる日、彼は遅くに起きた。通りに出てみたが、何もかも元のままである。腹もいつものとおりへ
っていた。じっと考えてみたが、うまい考えは思い浮かばない。だが、ふと考えが決まったらしく、ゆ
っくりと歩きだし、いつのまにか静修庵に来ていた。

(47) “望进去只有一个老尼姑”

庵和春天时节一样静，白的墙壁和漆黑的门。他想了一想，前去打门，一只狗在里面叫。他急急拾了
几块断砖，再上去较为用力的打，打到黑门上生出许多麻点的时候，才听得有人来开门。（庵は春の
時と同じように静かだった。白い塀にまっ黒い門。彼はしばらく思案してから、近づいて門を敲い
た。犬が中で吠えた。彼はあわてて煉瓦のかけらをいくつか拾い、もう一度近づいて、こんどはも
っと力を込めて叩いた。黒い門にいくつもの点々が出来た頃、ようやく誰かが門を開けにくる気配
がした。）

阿Qは急いで煉瓦を握りなおし、黒犬との戦闘にそなえた。だが犬は中から飛び出してこず、のぞい
てみると、年寄りの尼がいるだけであった。

(48) “你们要革得我们怎么样呢？”

“你又来什么事？”（おまえさん、また何をしに？）、尼さんはびっくりして言った。

“革命了……你知道？……”（革命だ……知ってるかい？……）、阿Qは口ごもって言った。

“革命，革命，革过一革的，……你们要革得我们怎么样呢？”（革命，革命って、カクメイはもう
いっぺん済んだよ、……このうえわたしたちをどうカクメイしようというの？）

尼さんは目をまっ赤にして言った。

“什么？……”（何だって？……）、阿Qは不審に思った。

“你不知道，他们已经来革过了！”（知らないのかい、やつらはやってきてもうカクメイしていった
んだよ！）

2017/2/17